

2学期がスタート！

須賀川市では夏休み中に 2 日間の授業日が設定され、例年とは違った状況で 2 学期を迎えることになりました。各学校では、1 学期の反省をもとに、2 学期に取り組むべき課題を明確にし、全職員が解決策や方向性を確認してスタートしたものと思います。

2 学期は 1 年の中で一番長く、学習や行事を通して子どもたちの成長する姿を見ることができる機会が多い学期となります。子どもに寄り添い、子どもの成長が感じられる毎日は、教師にとってこれ程うれしいことはありません。各学校において、充実した 2 学期となることを期待しています。



センター研修が終了！

7 月 23 日（火）の「スクールミーティング」から始まり、8 月 20 日（火）の「新学習指導要領対応のための実践セミナー」をもって、夏休み中のセンター研修 39 講座が終了しました。

今年度は延べ 400 名を超える幼小中の先生方に受講していただき、大きな成果をあげることができました。どの講座でも参加された先生方は、真剣に講義を聴き、演習などに意欲的に取り組んでいました。一人で 10 講座を受講した小学校の先生を筆頭に、複数の講座を受講した先生が数多く見られました。研修会に積極的に参加していただいた先生方に、感謝申し上げます。



組んでいました。一人で 10 講座を受講した小学校の先生を筆頭に、複数の講座を受講した先生が数多く見られました。研修会に積極的に参加していただいた先生方に、感謝申し上げます。

職員室の白い丸いテーブル(教育資料「内外教育」より抜粋)

児童数 100 人足らずの小さな小学校では、職員室の片隅にあった「白い丸いテーブル」に集まって、お茶を飲みながら、いろんな話をしていたという。ところが、校長が代わったのを機にテーブルを職員室から撤去してしまった。そこから職員室の雰囲気は一変した。ギスギス感だけが漂いビリピリして、誰も職員室に戻ろうとせず、担任する教室に閉じこもるようになっていく。重苦しい空気が学校中を覆い、笑い声が消えていった。

同僚性だとか共同性は、いくら研修を積んでも生まれえない。一見、ムダと思われた時間と空間が、それを創り出していたのだ。この学校では、まさしく「白い丸いテーブル」に象徴されるものであった。学級や学校が崩壊せずに、展望をきちんと切り開き、事態の打開に向けて動き始めるパワーが湧くかどうかは、この“のりしろ”に相当するものが、皆さんの学校にあるかどうかなのだ。共同性とは本来「汗と笑いの中から」生み出されるものだ。

先輩からの金言！

ある教育雑誌に紹介されたものです。先輩教員の学級担任として常に心がけた点について書き綴られていました。

- ①日々の保健指導と健康・安全の確保に努めよ。
- ②子どもの目の高さで話し合う機会を多く持つように努めよ。
- ③進歩の事実を知らせ、励まし、さらに“やる気”を起こさせて成就感を累積させよう。
- ④孤独な子どもをつくるな。
- ⑤一人一人の長所を伸ばそう。
- ⑥友愛の心情を育て、師弟の間に響き合う関係を醸成しよう。
- ⑦叱るとは「非を正して行動を修正させる」ことであって、怒ったり、怒鳴ったりすることではない。
- ⑧寛容・自由・規律の適正化を図れ。
- ⑨教師の指導は公平であれ。

※どの先生方も、日々実践されていることですが、子どもたちの輝きを一層高めるために、もう一度、心に刻み実践に生かしてみたい 9 点です。

《ペア学習やグループ活動は何のために？》

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める上で、話し合い活動をより活発にするペアやグループ学習などの授業形態の工夫も必要となってきます。しかし、ペア学習やグループ学習などの活動を、授業に取り入れることが目的ではありません。まず、何のために、何を意図してペアやグループの学習を行うのか、その目的を明確にして授業に臨むことが大切です。



目的を明確にするには？

〔「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」
平成30年度版 福島県教育庁県北教育事務所資料から〕

○話し合いを通した「目指す子どもの姿」を明確にする。

- ・「僕も同じ考えだ。これでいいんだよね。」（確 信）
- ・「そうそう、私もそう思うんだよね。」（共 感）
- ・「あれ、何か違うね。なぜだろう？」（吟 味）
- ・「と言うことは、こういうことかな？」（再構築）
- ・「もしかしたら、こうかもしれないよ。」（推 論）
- ・「だったら、こうしてみたらどうかな？」（創 意）



仲間と考えを共有したり、吟味したりすることを通して、子どもたち一人一人の中に対話が生まれ、新たな考えが作り出される。

○話し合いのねらいを明確にして授業場面に位置付ける。

○練り上げてよりよい意見にする。

- ・考えを広げ、深める場面
- ・対比させて考える場面
- ・1つの作業をもとに考える場面

○出てきた多様な考えを整理する。

- ・多面的な思考が可能な場面
- ・多様な解釈が必要な場面
- ・多くの発想を出させる場面

○子ども一人一人が「わかる・できる」ようにする。

- ・技能の習得を図る場面
- ・疑問の解決を図る場面

考えを共有させるための

教師のコーディネートの例

○考えをつなぐ言葉かけ

- ・「～さんのよいところはどこですか？」（発見）
- ・「～さんはどうしてこういう考えが浮かんだと思いますか？」（推測）
- ・「～さんの考えはどういうことですか？」（要約）
- ・「～さんの考えの続きが分かりますか？」（予想）
- ・「～さんの気持ちがわかりますか？」（共感）
- ・「ヒントが言えますか？」（補助）
- ・「～さんの説明をもう一度言えますか？」（再生）

○広げ・深める「つなぎ言葉」

- ・「だとしたら…」
- ・「たとえば…」
- ・「つまり…」
- ・「…をもとにすると」

教師の言葉遣いと「言葉の力」！

小学校や中学校の頃、授業中「先生が○○という言葉は何回言った」など、友達と回数を数えた経験がある先生方も多いのではないのでしょうか？ 時には、先生の口ぐせを真似した憶えもあるでしょう。

視点を少し変えると、授業中に教師が遣う言葉は、子どもたちにとって大きな学習環境、言葉の環境になっています。汚い言葉を遣うのは論外であり、教師は知的な言葉や温かい言葉の遣い手でなければなりません。子どもたちに知ってほしい言葉、吸収してほしい言葉を遣うことが大切です。例えば「臨機応変」という言葉も教師が遣わなければ、子どもたちは遣いません。自然発生的に出てくるのを待つだけでは、「言葉の力」はなかなか付かないのです。教師自身が意図して言葉を遣っていくことも大切なことです。教師の発するものすべては、子どもたちの学習環境となっていることを心得たいものです。